

『明覺禪師語錄』諸本の系統

椎名宏雄

一 問題点

ここにとりあげるのは、雪竇重顕（九八〇～一〇五二）の全著述類についての文献史的考察である。ところが、『明覺禪師語錄』という書物は明代初期の南蔵からわが大正大蔵經にいたる諸大蔵經の中に入蔵しているものの書名であるが、重顕の「頌古集」を欠く。したがって、小論の題目と内容との間に問題がないではないが、『明覺禪師語錄』の名がすでに永く廣く認知されていることと、この書の書誌をさかのばれば必然的に全著述におよぶことなどの理由から、あえて題目として用いる。

雲門宗の中興といわれる雪竇重顕は、北宋代前期の禪門を代表する碩徳であった。蘇州洞庭の翠峰禪寺に出世し、明州（浙江）雪竇山の資聖寺を薦したのみであるが、後者にあること三一年、その道譽は天下に知られた。語錄や偈頌は早くか

ら門人たちによってまとめられ、重顕の生前中にほとんど編集は成っていたようである。

重顕の滅後、門弟たちは先師の語錄を入れ藏させるべく尽力したが、それは実現しなかつたといわれる。⁽¹⁾ 事実とすれば、当時の大蔵經は開封で開版された勅版大蔵經（九八三完成）の続蔵部分であり、不如意に終つた理由も難解ではあるが、重顕の著述に対する当時の関心の高さを示すものである。

重顕の著作に關説する最古の資料は、かれの滅後一三年を経た治平三年（一〇六五）に、呂夏卿が書いた重顕の塔銘である。それによれば、編集者の門人八名の名と、洞庭語錄・雪竇開堂録・瀑泉集・祖英集・⁽²⁾ 頌古集・拈古集・雪竇後録、という七部集の題名をあげている。これが後代に多くの諸本を生む源流である。

ただし、この塔銘に記される七部集の順序は、個々の集が成った年時に準じてはいない。成立年時については、宋版・

五山版・元版などの現存古版に付せられている原序の年記によつて、四集については知られる。また、序文のない「洞庭語録」はもつとも早い成立とみられ、序に年記をもたない「後録」は、「⁽³⁾瀑泉集」の本文中に重顕自身が僧に「なんじ雪竇後録を見るや」と聞いていることから、「開堂録」と「⁽⁴⁾瀑泉集」の間に成つたことがわかる。「頌古集」はもつとも遅い成立といわれる。

そこでこの成立順に、七部集に付せられている原題名、編者・序者を一覧しておこう。なお便宜上、小論ではこれら七部集の略称を一貫して用いることとする。

No.	略 称	原 題 名	成 立	西暦	編 者	序 者
1	洞庭錄	住蘇州洞庭翠峰 禅寺語				
2	開堂錄	明州雪竇明覚大 師開堂語錄	天聖 4	1006	惟 蓋 竺	—
3	後 錄	雪竇和尚後録	天聖 8	1008	珍曾会居士	
4	瀑泉集	雪竇和尚明覚大 師瀑泉集	宝元 1(5)	1008	宝慶子 環如	玉
5	祖英集	慶元府雪竇明覚 大師祖英集	天聖 10	1010	應 円	応
6	拈 古	雪竇和尚拈古	天聖 10	1010	二三勝業文政勝業文政	
7	頌古集	大師頌古集	宝元 1(5)	1008	允誠・思恭允誠・思恭	
			遠		塵 崑山 曇 玉	

いま、永井氏の研究成果を、重顕の著作に関する文献史的叙述のみに限つて要約すると、およそつぎの諸点であろう。
 1 大正蔵経本の底本は嘉興蔵本であるが、そのテキストは完本ではないこと。
 2 東洋文庫蔵五山版に保存される八種の序跋疏などを基に、各七部集の成立を推定したこと。
 3 重顕の没後、語録の入蔵が企られたが拒否せられたこと。
 4 『祖庭事苑』が拠つた語録が、重顕語録の最古刊本であること。
 5 『祖庭事苑』所依の語録は、嘉興蔵本よりも完備していたこと。
 6 五山版の底本は最古刊本とは異なること。
 7 「四部叢刊」所収の宋版『雪竇四集』は、五山版の底本と同一の系列であること。
 8 「頌古百則」の成立は、重顕の雪竇山入山以前であること。

ところで、宋代禪宗史ないしは禪籍の文献史的研究の上から、重顕の著作類はきわめて重要な対象であるにもかかわら

五山版や四部叢刊本所収の「頌古百則」の排列が、一夜本『碧巌集』のそれに一致すること。

以上、主要な論点のみの要約であるが、いずれも空前の指摘である。さらに、柳田聖山氏は「禅の語録」15の『雪竇頌古』に載せる解説⁽⁶⁾で、新たに重顯語録の元版調査等をふまえ

て、巨視的に全般的な考察をくわえ、簡にして要をえた文献解説をされている。

このように、重顯の語録についての文献研究は、両氏の考察によってはじめて明るみに出たのであるが、なおそれでも万全ではなく、不明な点はあまりにも多い。その原因は、遺

No.	仮称	刊行年	西暦	巻冊	刊行者等	所	在	洞庭 開堂後錄 瀑泉祖英 大拈古頌古	現存本の収録順
⑯ ⑯ ⑮ ⑭ ⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①	正和縮和竜黃嘉明明北南上元五四開北 藏藏藏藏榮興應藏藏海山部禧宋	開禧1 泰定1	大觀2 元代	一一〇八 一二〇五 一二三五 一二八九 一三三四	七集 七集 四集 七集 七集	雪竇山德雲 三聖寺東山湛照 雪竇山円蔵主 淨戒重校〔廻〕 東洋、成賓、東急 上海図	北京圖 東大旧(震災失) 上海図 快友寺 成賓(二部)	北京圖(四部叢刊影印)	洞庭 開堂後錄 瀑泉祖英 大拈古頌古
昭和明治3 37 17	江戸期雍正乾隆1311 明崇禎7 和正統19樂 治永樂 明永樂 明正樂 明樂	一一〇八 一一四二一〇 一一四四一〇 一一四四一〇 一一四四一〇	一一〇八 一二〇五 一二三五 一二八九 一三三四	一 一 一 一 一	存三集 六卷六帖 六卷二冊 六卷二冊 六卷二冊	存三集 六卷六帖 六卷二冊 六卷二冊 六卷二冊	北京 泉州後刷 北京 京都貝葉書院 京都弘経書院 東京大藏經刊行会	雪竇山德雲 三聖寺東山湛照 雪竇山円蔵主 淨戒重校〔廻〕 東洋、成賓、東急 上海図 快友寺 成賓(二部)	洞庭 開堂後錄 瀑泉祖英 大拈古頌古
一九二八年 一九〇四年 一八八四年	一九二八年 一九〇四年 一八八四年	一九二八年 一九〇四年 一八八四年	一九二八年 一九〇四年 一八八四年	一九二八年 一九〇四年 一八八四年	一九二八年 一九〇四年 一八八四年	一九二八年 一九〇四年 一八八四年	一九二八年 一九〇四年 一八八四年	一九二八年 一九〇四年 一八八四年	洞庭 開堂後錄 瀑泉祖英 大拈古頌古
卷卷卷	卷卷卷	卷卷卷	卷卷卷	卷卷卷	卷卷卷	卷卷卷	卷卷卷	卷卷卷	卷卷卷

双边(7)

存する古版類がほとんど断欠本であること、唯一の例外である東洋文庫蔵五山版の補写部分の性格が未詳であったこと、などによる。これらの難点を補うためには、さらに広く重顕関係の著作類全般についての考察検討がなされなければならない。卑見によれば、重顕に関する著作類の研究は、重顕の禅宗史上における地位によつて重要であるとともに、宋元版禪籍の文献史的研究の視点からも、すこぶる寄与するものが少くないのである。

このような観点から、筆者は以下において現存見られる限りにおける重顕の著作類をとりあげ、古版類を中心とした再検討をくわえ、これらテキスト全般の系統を改めて考えてみたいと思う。まず、原則として七部集を收めるテキスト類の版別一覧表を掲げておく。なお、現存しない版についても、明らかに刊行されたと思われるものはここに入れた。

二 古版類

(一) 宋版

現存する唯一の宋版は、北京図書館に所蔵される五巻五冊本であり、『北京図書館古籍善本書目』集部には、つぎのとおりに著録されている。

四集」の原本であることが知られる。

かくして、北京図書館本の宋版は、「四部叢刊」所収本（以下、四部叢刊本と略称）によつて、容易にその内容は知られるわけである。ただし、四部叢刊本は原本に欠ける一葉を「大正新脩大藏經」第四七巻所収の『明覺禪師語錄』の該当箇所によつて宋版風に補刻しているから、厳密には原本の宋版と全く同一ではない。その該当箇所は、「雪竇和尚拈古」の原本第一紙裏と第二紙表の部分であるが、郭外にその補刻につ

上海涵芬樓、借常熟瞿氏鉄琴銅劍樓藏宋刊本景印。原書、板匡高十八公分、寛十三公分。

また、「雪竇四集」の巻尾には、民国二〇年（一九三一）三月に崑山の胡文楷が撰した跋がおかれるが、そこにもこの四集の原本は鉄琴銅劍樓の所蔵であることが明記される。そして、鉄琴銅劍樓の質量ともに貴重な藏書のすべては、解放後に北京図書館に所蔵されることとなつたといわれる。⁽⁸⁾したがつて、現北京図書館所蔵の当該書五巻五冊本こそは、「雪竇

慶元府雪竇明覺大師祖英集二卷宋刻重
頃撰
瀑泉集一卷
誠軒允
雪竇顕和尚
明覺大師頃古集一卷宋刻
頃撰
雪竇顕和尚

いて注記しているのは編者の学問的姿勢を示している。

ところで、鉄琴銅劍楼は中国近代の四大藏書家の一として有名な常熟（江蘇省）瞿氏の藏書楼であるが、瞿鏞が撰述した『鉄琴銅劍樓藏書目録』（一八五七序）卷二〇には該書宋版についての書誌的に有益な解題がみられるので、左記に引いておこう。

雪竇頌古集一巻 拈古一巻 瀑泉集一巻 祖英集二巻

宋刊本

宋僧重顕撰題、弟子遠塵・允誠・思恭・円応等集。有曇玉・円

応・文政等序。遵王錢氏所藏、祇有祖英集一種。此其全帙也。

頌古集後、有參學仙都沙門簡能校勘一行。祖英集後、有四明洪

拳刊一行。每半葉十一行、行二十字。廓字減末筆、當是寧宗後

刻本。旧為泰興季氏藏書。

卷首有季振宜藏書朱記。

（9）

右の解題がいう季振宜の旧蔵印は、「頌古集」と「祖英集」

卷上の各巻首にみられる。季振宜（一六三〇～¹⁰＊）は泰興（江

蘇省）の人で藏書に富んでいたが、その藏書目である『季滄

葦書目』や、また、この藏書の源泉をなすといわれる常熟の

錢曾の藏書を記録する『述古堂藏書目』には、当該の宋版五

巻五冊は著録されていない。また、「頌古集」の巻首には「臣

墉」という古い旧蔵印が捺されているが、目下これはたれの

ことが特定できない。その他、当該の宋版についての古記録も知られず、季振宜以前の伝来については今のところ未詳である。

さらに、右の解題がいう欠筆に関する記事に注意しておこう。本宋版には刊記がなく、また、「祖英集」の末尾に刻される「四明洪拳刊」の五文字は唯一の刻工銘と思われるが、その名は宋版の各種刻工名表¹¹に照らしても未詳である。してみると、寧宗の避諱文字の存在は、刊行時期に関する直接的な唯一の手がかりである。避諱欠筆が宋刊本に共通する厳密なものでないことは斯界の常識であるが、それがみられる場合は、刊行年の上限を切る貴重な資料になるという。¹²してみると、当該の宋版は寧宗の則位（一一九五）以後の刊行ということになろう。

さて、四部叢刊本の構成はつぎのとおりである。

一、頌古集 28紙

（一）序 曙玉撰

（二）本文（一〇〇則）

（三）校勘銘（簡能）

二、拈古 24紙

（一）本文（一〇〇則）

三、瀑泉集 19紙

（一）序 天聖八年（一〇三〇）、円応撰

（二）疏三種

（三）本文（七九則）

四、参同契注

(五) 真讃(一〇篇)

四、祖英集(上下) 上23紙、下26紙

(一) 序 天聖一〇年(一〇三三)、文政撰

(二) 本文(一五七篇)

(三) 刻工銘(洪拳)

以上であるが、この原本である宋版はいつたい前述の雪竇七部集が同時に刊行されたうちの四集なのであろうか、またはこの四集だけが刊行されたときの完全セットなのであろうか。この点を考えると、まず、右に掲げた序・疏・銘などには、これを示唆する記事はみられない。序文は個々の集に対する原序なのである。また、四集すべての刻字体を精査すると、明らかに補刻とみられる部分もある。しかし、さいごの「祖英集」の巻尾におかれる「四明洪拳刊」の五文字は、尾題の直前の下部にやや小さく刻記されているという体裁上からみて、これは刊行者名ではなく刻工の刻銘であろうと考えられる。さらに、七部集のうちで四集に含まれないのは、いわゆる語録類だけの三集である。

このようにみると、この宋版「四集」は語録類三集を除いた偈頌・詩歌などの文学的作品類だけを五巻五冊のセットとして刊行したことと思われる。つぎに紹介する五山版とのちがいは、語録類三集がないことのほかには、五山版が四周单邊・無界の版式であるのに対し、宋版は左右双辺・有界で

あること、五山版は「拈古」の巻首に開禧元年(一一〇五)撰述の徳雲序を置き、「瀑泉集」末尾に重顯の塔銘、自如の重刊語録疏、募縁者や刻工の記名などを補写するのに対し、宋版にはいずれもみられぬこと、などである。ただし、さいごの補写は、台北の国立中央図書館に所蔵される南宋版『祖英集』の巻末に刻記されるものと同じであるから、これはもともとは五山版の「瀑泉集」の巻末に刻記されていたのではない、他の異版などから補写したものとみられる。

いつたい五山版は、右の徳雲序の存在とみずからの正応二年の刊記により、開禧元年(一一〇五)に雪竇山で徳雲が刊行した宋版を正応二年(一一八九)に覆刻した覆宋版であることは、まずまちがいない。この開禧元年版は、徳雲の序文からも五山版の形態からも、七部集すべての総集であった。すると、宋版「四集」は開禧版ではない。徳雲の序は後に紹介するとおり、それ以前にはしばらく本書の刊行がなかつたとのべる。それに、四部叢刊本には前掲のような寧宗の避諱文字がみられる。したがつて、これらを総合すると、宋版「四集」は開禧版を承けながら寧宗以後(一一二二五〇)に刊行された南宋版ではなかつたかと思われるのである。

ともあれ、この南宋版はたとい四集だけにしても、現存する最古の『明覺禪師語錄』であり、そのテキストとしての価値はきわめて大きいといわなければならぬ。

(二)、五山版

本書の五山版は宋版につぐ古い刊本であり、しかも若干の補写と欠丁こそあるものの、一応全七部集のセットを遺存しているという点で、古版の中でも最重要の価値をもつものである。この五山版は、川瀬一馬『五山版の研究』によれば、東洋文庫、成竇堂文庫、大東急記念文庫、建仁寺両足院に所蔵されるが、⁽¹³⁾ 東洋文庫本のみが完本で他は断欠本または零本であるという。筆者は前三者を閲覧しているが、いずれもすでに解題がなされているので、便宜上まずそれらをここに一括して転載しておこう。

〔東洋文庫本〕

(明州) 雪竇明覚大師開堂語錄 二卷

宋釈雪竇重顕撰 積文軫等編 積伝宗等校

正応二年刊後修(京、東福寺)

半二冊

*改装栗皮表紙。無題簽。寸法二十・五×十五・四糸。本文巻首「明州雪竇明覚大師開堂語錄并序」と題し、序に続いてすぐ本文に接続する。单邊、無界(祖英集は主に有界、その他一部有界の丁を交ゆ)。毎半葉十一行、毎行二十字。匡郭寸法十七・九×十

一・八糸。版心、白口單黑魚尾、「語錄(丁)」「雪(丁)」等。下

巻頃古末に「明覺大師語錄雖傳來年久曾無人開板今命工鏤梓欲流通/将来伏願皇風永扇祖道重/興矣時正応二年仲春下旬/三聖住持比丘湛照謹記/奉行知藏師元」の刊語あり。本書、補刻丁多く、時に巻上「雪竇和尚住洞庭語錄」第一九丁、巻下「慶元

府雪竇明覚大師祖英集上」一~三、七、八、十七~二三丁「慶元府雪竇明覚大師祖英集下」一~十、十二~十四、二~四丁等に有界十一行の丁を有す。また、「雪竇和尚明覚大師瀑泉集并序」十八、十九丁、統いて「明州雪竇山資聖寺第六祖明覚大師塔銘」五丁は「江戸初期」の手になる補写。この補写の中、「塔銘」末に「童行 祖榮 同募縁/雪竇住山 守常 劍縁/四明徐汝舟刊」及び「祖英集下」末に「四明洪拳刊」の原刊記あり。北京図書館蔵宋刊本との関係は尚明らかではないが、本書は或いはその版式よりして覆宋版か。各冊巻首に「室町末」の筆にて「芳春常住二冊内」と墨識語あり、また、「雪竇和尚住洞庭語錄」下冊、祖英集の各首に「万勝寺」の墨署あり。印記「藏書鑒/冷香惠林南豊」「酒竹文庫」「好風青月」。

『五山版の研究』には第十四回に本書巻末を収める。同書によれば、本書は現存唯一の完本、但し、鎌倉期の原刻版木は意外に少なく、後次の補刻丁が多い。しかも頃古十一・十二丁、祖英集十九~二十一丁等の如く、原刻版木が摩損の極に達して殆ど字画定かならず、墨を以て殆どの字をなぞったような丁も少なくない。案するに補刻は室町期に下るものであろう。⁽¹⁴⁾

〔成竇堂文庫本〕

雪竇和尚語錄 宋釈惟蓋等編 四卷 二冊

正応二年刊。单邊、無界(有界少々交れり)、十一行二十字。初印。首、雪竇和尚住洞庭語錄、次、明州雪竇明覚大師開堂語錄(首一葉補写)・雪竇後錄・雪竇和尚明覚大師瀑泉集を收む。巻三は補鈔、巻末に、祖英集を江戸末期に抄録補写せり。本書は元

刊覆刻なれど、界線を省き、若干葉（洞庭語の首五葉・瀑泉集首葉等）有界を存する。補写の際、明本と校正を行なう。裏打改装。江戸末期香色表紙付。帙外題蘇峰。（図版492・493⁽¹⁵⁾）

〔大東急記念文庫本〕

南北朝刊 一冊
雪竇和尚語録

南北朝刊。五山版。宋惟蓋等編。四周单邊、毎半葉無界十一行二十字。匡郭内、縱六寸、横四寸。本書は雪竇和尚語録の後半を存し、瀑泉集（十九葉）・拈古一百則（二十四葉）・頌古一百則（二十八葉）を收めてある。瀑泉集の第一葉七行のみ界線を刻し、以下は無界にしてある。初印にちかく、卷首尾に印文不明の朱古印記を捺す。（巻首の分は紙裏に捺す）改装。江戸期の褐色表紙を添へてあり、大いさは縱七寸三分、横五寸一分。（図版八三参照⁽¹⁶⁾）

五山版三本の解題は右のとおりであるが、みると書名もまちまちであり、巻数や刊時の記載もそれぞれ個別的である。これは、東洋文庫本以外は完本でなくて原初形態が不明であることにもよるが、その東洋文庫本の記載にして「開堂語録」をもつて書名とし全二巻とするのは便宜的な措置にすぎず、本書の書誌がいかに複雑でやっかいであるかを示している。事実、右三本の解題をいくら精読しても、これらを別に書き出して比較しないと、それらの構成内容は理解できないであろう。

そこで筆者の調査をもとにして、右三本の構成内容を対照的に示したのがつぎの表である。

東洋文庫本		成簀堂文庫本		大東急文庫本	
〔第一冊〕		〔第一冊〕		〔零一冊〕	
1 開堂録	20紙	1 洞庭録	19紙	1 瀑泉集	19紙
(1) 曾会序		(1) 本 文		(2) (1) 円応序	
(2) 本 文		(2) 本 文		(3) (2) (1) 本 文	
2 瀑泉集	19紙	2 開堂録	20紙	2 拈古	24紙
(1) 円応序		(1) 曾会序 (補写)		(1) 円応序	
(2) 本 文		(2) 本 文		(2) (1) 本 文	
3 後 錄	20紙				
(3) 本 文					

(3) (2) (1)	頌古集	8	拈古文	7	德雲序	6	第二冊	(2) (1)	本如玉文序	5	後錄	(1)	洞庭錄	4	原勸緣記等	(4) (3) (2) (1)	重刊疏	大慧讀	塔銘	補寫
原校勘記	本曇玉文序	28紙	本允誠等序	古文	24紙	古序	2紙	本玉文序	古序	20紙	錄	文	19紙	原勸緣記等	原勸緣記等	刊疏	讀	大慧讀	塔銘	補寫

(5) (4) (3) (2) (1)	補寫	8	本疏三文篇序	7	瀑泉集	6	第二冊	(2) (1)	本允誠等序	5	拈古序	(1)	二則	4	補寫	(2) (1)	本如玉文序			
原勸緣記等	重大塔讀祖英集	7紙	原勸緣記等	重刊慧疏讀銘	大塔讀銘	7紙	原勸緣記等	本疏三文篇序	本疏三文篇序	19紙	古序	古序	1紙	(補寫)	原勸緣記等	原勸緣記等	二則	則	二則	則

(3) (2) (1)	頌古集	3
原校勘記	本曇玉文序	原校勘記

9 刊 語 1 紙

10	祖 英 集	上23紙、下存
26	紙(第26)	32紙欠
(3) (2) (1)	文 政 序	
	本 文	
	(3) 原刻工銘	

前掲の解題と右の対照表からも明らかのように、これらの五山版は版式や個々の紙数を等しくする同版のテキストである。刊行時期は東洋文庫本のみに遺存する貴重な刊語によつて、鎌倉末期の正應二年（一二八九）であることが知られる。

刊行者の湛照は、聖一国師の法嗣東山湛照（一二三一～一二九一）であり、その開山地である京都三聖寺では、正應元年から二年にかけて、応庵・密庵・虎丘・破庵の四語錄とともに当該の『雪竇明覺禪師語錄』を刊行したのであつた。これは、鎌倉時代に一時に一処で五山版禪籍をもつとも多種上梓した殆んど唯一の例といわれるが、東山に連なる伝燈系譜上の祖師四者の語錄と並んで重顯の語錄を上梓したことは、東山にとつては該書が特別な意味をもつていたものと察しられる。

ともあれ、東山の尽力により、本書は貴重な五山版を伝存させることとなつた。特に全七部集を保存する東洋文庫本の価値は絶大である。しかし、他の二本が示す現存調査の状況

からみても、五山版の本来の調卷がいかなる順序であったのかは予断を許さないものがある。東洋文庫本にして東山の刊語は「頌古集」の末にあり、原総序とみるべき徳雲序は第二冊目の巻首に置かれているからである。ただ注目すべきは、後に掲げる南蔵本の順序があたかも東洋文庫本五山版に一致している。この事実は、両者の祖本が同一の順序であつたことを思わしめるものがあるが、それもなお推定の域を出ない。

東洋文庫本の徳雲序は、つぎに紹介する元版のそれとは異り、半葉四行七字の大きな行書体で、明らかに開禧元年の原本そのままの覆刻である。この序文は開禧元年の刊行状況を知らしめる重要な一文であるから、以下その意訳と本文を示してみよう。

明覺禪師は、この雪竇山に住持すること三〇年以上にわたり、その名は諸方に雷霆いた。時に、天衣義懷は主席の中の莊士であつた。そのために、天衣のもとからは慧林若沖・慧林宗本・法雲法秀・長蘆応夫を輩出し、明覺の禅道は天下に盛んとなつた。しか

し、これに前だつて、なぜか明覚の語録が刊行されたことを聞かない。したがつて、雪竇山の者が刊行してこそ、はじめて明覚を祖師とするに克るのである。世に錢塘と福唐の木版本は優れていふといふ。眞実を透闇せる眼のある者が本書を閲覧すれば、きっと明覚の清標を百載にもわたつて挹みとり、その蟄戸い玄関を開くことができるであろう。その時こそ、酒で知るであろう、正法眼藏の付囑があることを。

時に開禧元年（一二〇五）の仲冬、雪竇山住持の徳雲が謹しんで題す。

明覺禪師、住当山三十余年、雷霆諸方。時天衣方主中粦。由是冲・本・秀・夫出、而盛其道於天下。前此蓋未聞有刊其語。於山中者及是、乃克為之祖。錢塘・福唐板本為優。具透闇眼者閱之、可以挹清標於百載、啓蟄戸於玄闕。廻知、正法眼藏付囑有在。

時開禧元年仲冬 雪竇住山徳雲謹題

右の序文を書いた徳雲は、宏智正覚—自得慧暉—雪竇徳雲と法系を次第する曹洞宗の人であるが、伝記などは未詳である。開禧元年（一二〇五）には雪竇山の住持として、はじめて雪竇山から先輩の住持であつた重顕の語録を刊行したのである。先行する錢塘（浙江省）と福唐（福建省）の刊本を底本として用いたようであるが、くわしくはわからない。いずれにせよ、わが五山版がこの徳雲序刊本を底本としたことはまちがないであろう。

さらに五山版の特徴は、「瀑泉集」の末尾に大陸版の諸記事を補写していることである。東洋文庫本と成簣堂文庫本にそれは共通するが、後者の方が詳しく、かつ虫損もない。すなわち、(1)紫陽真人張伯端撰「読雪竇禪師祖英集」、(2)呂夏卿撰「明州雪竇山資聖寺第六祖明覺大師塔銘」、(3)「大慧和尚讚師画像」、(4)自如撰「重刊語録疏」、(5)募縁者銘、(6)刻工銘、の諸記であるが、特に書誌的に価値のある(4)以下をつぎに記載しておこう。

重刊語録疏

浙江 万寿住山 自如 撰

寺既燬、印板亦隨燼。人每病其磨滅、而欲新之。今其時矣。凡我同志、痛先覺之洪規、闡千載之芳烈、其可後乎。

右伏以、乳峯翠嶺、目前万象皆空、舌本瀾翻、瀑下千尋如故。天荒地老、山深水寒、寥寥浮幻何足云、落落宏規還可復。一字根極、學生眼開印蟾輪、何必蹄涔、覲夜光須震滄海。巧出匠手、匪求蝕木於文、世有知音、不在焦桐之発。謹疏。

童行 祖榮 同募縁

四明徐汝舟 刊

なお、東洋文庫本には末尾の「四明徐汝舟 刊」の直前に「雪竇住山 守常 勸縁」の八字一行が写されている。なぜ成簣堂本にはこれがないのかは難解であるが、ともに同版の大陸版から補写したのにまちがいないであろう。

その大陸版とはなにか。それは、右の「重刊語錄疏」を書いた自如が手がかりである。この人は「浙江万寿住山自如」とあるからには、『増集続伝灯錄』卷四に杭州中天竺一溪自如禪師⁽¹⁸⁾として伝を収める人にちがいない。杭州中天竺寺は北宋末の政和四年（一一一四）には中竺⁽¹⁹⁾天寧万寿永祚禪寺の勅額を受け、明代以後は中天竺寺と称した名刹である。しかばね自如は偃溪廣聞——雲峰妙高——一溪自如と次第する大慧派六世の人で、天暦初年（一一三八）に中天竺寺に住している。⁽²⁰⁾したがって、この重刊疏は元代に重顯の語錄を重刊したときのいわば勧進帳であり、それはつぎの元版で詳述する泰定元年（一二三一四）刊行の元版であろう⁽²¹⁾。

自如の疏が泰定元年版であれば、それにつづいて筆写されている⁽⁵⁾募縁記以下の諸記もまた、同じ元版のものとみてよい。あたかも現存する元版は端本であり、これらの諸記を欠く。しかし、第三節の「祖英集」元版を紹介する際に詳述するが、石井積翠軒文庫旧蔵の該書にこれらの諸記が刻されていることから、元来は「祖英集」末尾の刻記であつたことが知られる。ここにわれわれは、五山版の本書に後に元版からの貴重な諸記を補写しておいてくれた先人に対して、卒直に感謝しなければならない。

先人は元版のみならず、明版からも補写をしていた。成賓堂本の「後録」末尾には、明本からの補写と注記して、「師

問大竜語底默底……行脚始得」と「僧問只在目前……透水透沙」の二則を写す。これらは五山版ではなく、嘉興藏本卷二の「後録」末尾にある二則である。よつて知る、先人はこの五山版と元版・明版とを対照していたことを。ついでにいえば、五山版と嘉興藏本とでは若干の本文の出入がある。たとえば、後者の「洞庭錄」第一七則と第一八則の間に五山版には別の四則があり、同じく第一〇則の次には別の語句が含まれている。その他、各集の首部におかれると序文は両版に若干の文字の異同があり、また嘉興藏本では本文に組み込まれていて一行が五山版によつて小見出しであることが判明するなど、五山版のテキストとしての価値はすこぶる大きい。

なお、さきに引く自如の疏中にいう雪竇山の火災については、つぎの元版の際に詳述する至元二五年（一二八八）の大火灾のことであろう。また、「四明徐汝舟刊」の一行は、その位置関係と未詳の名称からみて、これは刊行者の記銘ではなく、おそらくは刻工銘であろう。

五山版は覆宋版であるから、全七集を包括する書名をもたず、そのため各集は独立した書のように分離・離散の宿命をはじめから担つていたと思われる。じじつ、「祖英集」のように分巻されている書は別行されなされている。この別行本については第三節で検討したい。

また、五山版は室町後期の明応三年（一四九四）に後刷本が

作られたようで、この時の刊本三冊が「泉南後刷」としてかつて東京帝大に所蔵されていたが、関東大震災の際に焼失した。

『新編籍目録』の著録するところである。⁽²²⁾

(三) 元版

本書の元版には、成竇堂文庫に一本と上海図書館に一本、の合計三本の現存所蔵が知られている。ただし、上海図書館本については筆者はまだ閲覧の機会がなく、目録によつて知るのみであるから、以下では主として成竇堂本の紹介と検討ということになる。

成竇堂本二本については、すでに『成竇堂善本書目』(一九三一年)と『新修成竇堂文庫善本書目』(一九九一年)にそれぞれ解題が収められている。また、後者には第一冊の卷首、第二冊の巻首と巻尾、の計三葉の写真が載せられている。⁽²³⁾しかし、後者の本書についての解題は前者のそれを補つた記述内容であるため、書誌的な全般を知るには両者を併せみなければならず、しかも両者ともに記述が硬直でやや難解である。したがつて、ここでは筆者が実際に調査した結果をもとにして、改めて書誌的な諸事項を平易に記載したい。

まず、成竇堂所蔵の元版二本は同一版であり、一は完本二冊、他は上巻一冊のみの端本である。したがつて、元版の書誌は完本二冊をみればほぼ充分ということになる。

完本二冊の書誌的特徴は、以下のとおりである。

卷 冊 乾坤二冊

表 紙 薄茶色楮紙 (23.3cm×15.3cm)
題 簿 線装袋綴

匡 郭 なし、墨書「雪竇錄乾(坤)」(左上)、「共弐」
(右下)

行 格 有界、左右双辺 (18.7cm×13.4cm)

紙 質 每半葉一行、毎行110字 (序は八行一四字)

小 口 薄手の唐紙、裏打なし

版 心 墨書なし

白口、黒魚尾、「語錄(又は雪)(丁)数)」、版
心上部にまま刻字数を刻す

書 点 あり

朱 刻 なし

補 写 なし

刻 工 なし

銘 記 なし

刊 著 あり(別紙)

「善慧軒」(黒陽、各冊表紙、同巻尾)、「彦梁」
「彦洞」(共に朱陽、各冊巻首)、「掖・斎」(朱陽、

各冊巻首)、杉垣移珍藏記」(朱陽、各冊巻首)

各冊の末尾にみられる墨書識語は、つぎのとおりである。

(乾冊末) 天文十一壬寅三月初四於善惠軒下覽之次叨加朱句耳

／瓢山五十三齡

(坤冊末) 天文十一壬寅暮春初六於善惠室內披覽之次信筆朱句

矣／瓢山人五十三齡

また、成簀堂徳富蘇峰氏が本書を購入した際に和紙半葉に墨書捺印したものが、本書に挟みこまれている。有益な識語であるから、これもつぎに掲げておく。(句読点筆者)

是書、実是泰定元年、我正中元年刊也。藏書印、一曰善慧軒、是京都東福寺塔頭也。一曰彦梁、未詳為何人。一曰彦洞、々々字明叟、蘭洲芳禪師之嗣法、京都建仁寺僧也。晚年不知其終歟。一曰掖斎、即狩谷印之也。卷末、天文十一壬寅暮春、於善慧室之内披覽之次信筆朱句矣瓢園山人五十三齡之文字、要是高僧之手沢、名刹之遺宝也。予偶凡接觸此冊子、仰快不能自禁、仰以重值購之。蓋雪竇頌古、是禪宗之津箇。碧嵒之一書、却不免為蛇足也。

明治三十四年七月念九 蘇峰手録

本書の構成内容は、つぎのとおりである。

〔第一冊・乾〕

- 1 序 開禧元年(一二〇五)、徳雲撰
- 2 序 泰定元年(一三二四)、如芝撰
- 3 開堂録 20 紙

1 紙

(1)文軫序 (2)本文

4 後録 20 紙

(1)如玉序 (2)本文

〔第二冊・坤〕

- 5 拈古 24 紙

(1)允誠・思恭序 (2)本文

- 6 頌古集 28 紙

(1)曇玉序 (2)本文 (3)校勘記

以上のとおりであり、本元版もまた全七部集中の四集だけの遺存である。成簀堂文庫の他の一本は、右の1～4と5の第一紙を合わせて一冊とし、以下を欠く端本である。右の二冊本と比較すると、やや後刷ながら完全に同一版であることが知られる。洒竹文庫の旧蔵である。

問題は宋版と同じく、この元版ははじめから四集だけのセットであったのか、または全七部集セットの端本なのか、という点である。成簀堂の二本は、第二冊目こそ比較不能であるが、第一冊目の調卷は同じであるから、あたかも刊行時の形態が四集本であつたかのような印象を与えていた。そこで注目されるのは、この元版が刊行された時の序文とみられる如芝の言辞である。この序は、管見した限りでは他の諸本に存在しない貴重な一文であるから、意訳と本文を以下に掲載しよう。

『明覺大師語錄』は、板行されてからもう久しい。しかし、その奥旨の微妙言と峻機妙用は、とても陋聞浅識の者ではわから

ないし、管窺で蠡酌するようなものである。雪竇山は燬變てしまい、板木もまた燼となってしまった。そこで、方外の円藏主が有縁の者から淨財を募つてこれを重刊する。連城の鱗や照乘の珠といわれるような名玉が、趙廷の帰や合浦の還の例のように、復びもとにもどるならば、後代の学人を崇拜させるであろう。それは吾教にとって、どうして少かな補けなどであろうか。

泰定甲子（一三二四）仏成道の日、禾城本覺寺の末學比丘、如芝が拝書す。

明覺大師語錄、板行久矣。然奥旨微言、峻機妙用、匪陋聞浅識者所可得、而管窺蠡酌也。雪竇燬變、板亦就燼、方外円藏主、募緣重刊。連城之鱗、照乘之珠、復為趙廷之帰、合浦之還、俾後學有所崇拜。其於吾教、豈少補哉。

泰定甲子仏成道日 城本覺末學比丘 如芝 拝書

撰者の如芝は『増集続伝燈錄』卷五に杭州淨慈靈石如芝禪師として所伝される人で、虛堂智愚に嗣いで嘉禾の興聖寺、⁽²⁴⁾台州の湧泉寺、嘉興の本覺寺に住したのち、淨慈寺に晋住した。⁽²⁵⁾『淨慈寺志』卷九によれば、それは泰定の初めで如芝あたかも八四歳、海内から等しく尊仰をあつめたといわれる。したがつて、その直前とみられる右の一文はまさしく老翁徹肝の言辞であつた。

右文によれば、『明覺大師語錄』の刊行はすでに久しく行

われず、雪竇山は火災で板木を焼失していたので、新たに円藏主が施財を募つて重版したのが泰定元年（一三二四）時の元版であつた。ここにいう雪竇山の火災とは、至元五年（一二八八）四月、石門善来が住持であつたときの大火灾である。さきの五山版が補写する自如の重刊疏がいう火災も、まさしくこの厄災であつた。注意すべきは、如芝も自如も重刊、といつていることである。いうまでもなく底本そのままの再版が元版だつたのである。

では重版の底本はなにか。それは、この元版が開禧元年の徳雲序を巻頭に置くこと、開禧元年本を承けるとみられる前述宋版と版式が一致することなどから、元版が底本としたのはやはり開禧元年本であつたとみてよい。すると重版であるから、やはり元來は七部集のセットであつたものが、成竇堂の二本はいずれも端本が伝存したと考えられよう。

つぎに、上海図書館蔵本について、『上海図書館善本書目』に左記の著録がみられる。

雪竇和尚拈古一卷 頌古集一卷 祖英集一卷 宋积重頭撰、元覆宋刻本、半葉十一行、行二十字。

上海⁽²⁷⁾

ただこれだけの著録では、行格が宋・元・五山版と同じなほか、くわしいことは不明である。しかし、泰定元年刊本以外の元版は從来他に知られていないから、あるいはこの覆宋

版も成竇堂本と同じ泰定版ではないかとも思われるが、今後の調査を期したい。^{*}

なお、泰定元年刊本の零本とみられる積翠軒文庫旧蔵書の「祖英集」一冊については、第三節で「祖英集」をとりあげる際にのべる。

三 南蔵本以降の諸版

(一) 南蔵本

大明南蔵の中に本書が含まれていることは、『大明三藏聖教南蔵目録』の廻字函に、つぎの著録があることによつて知られる。

廻十一卷一百八
十張尾半二張

1511 伝法正宗論

1512 輔教篇

1513 雪竇明覺禪師語錄⁽²⁸⁾

これが本書の初入蔵とされていいるものである。ただし、厳密には右の目録は「永樂南蔵」を対象とするものであり、その原型ともいべき「洪武南蔵」⁽²⁹⁾の続蔵部分である用・軍の函中に本書はすでに入蔵している。しかし、洪武南蔵は所在が曉天の星であつて内容も詳しく述べられず、これを再編して永樂一七年(一四一九)ごろに完成した永樂南蔵が広く行わ

れているので、ここでも永樂南蔵所収本を南蔵本と称して対象とする。

とはいゝ、本邦に現存する南蔵はこれまたあまりにも少ないのであるが、さいわいにも山口県快友寺所蔵の南蔵を単独で調査された野沢佳美氏が、その中の重要な仏典類をえらんで影印刊行された『山口県快友寺所蔵 明代南蔵初入蔵經典集』⁽³⁰⁾の中に本書が収録され、斯界をおおいに裨益している。また、右影印本の付録解説の中で、氏は本書についての簡明な書誌的解説をなされている。

これらによれば、快友寺には『明覺禪師語錄』六巻中の第一・二・五・六の四巻を現存している。そして野沢氏は、現存する範囲で南蔵本の構成内容を流布本系の嘉興蔵本と比較し、いくつかの重要な点を指摘されている。これを要約してつぎに示そう。

(一) 構成的には、南蔵本・嘉興蔵は基本的に同一である。

(二) 内容的には、南蔵本には卷一の巻首に重頭の小伝を置く。

(三) 嘉興蔵本卷一「開堂錄」が南蔵本では^{1/3}に節略されている。

(四) 嘉興蔵本卷六の巻末に付される「明覺大師塔銘」を南蔵は欠く。

以上であるが、改めて筆者が南蔵本と嘉興蔵本の全文を対

校したところ、(一)(四)は右のとおりであるが、(二)の節略は^{1/3}ほどの大量ではなく、ほぼ一五%減であることが判明した。この部分の節錄は、各則の長文な語句に限って省略され、則そのものを削除するという形式ではない。なお、その他の箇所でも若干の削減や出入がみられる。

ただし節錄や削除といつても、嘉興藏本は南藏本よりも二百年以上後代のテキストであるから、南藏本そのものの再編状況については、厳密にはその底本との対校によらなければならぬ。いつたい、南藏本の底本は宋版か元版であるが、おそらくは前掲の泰定刊行の元版であろう。しかし、その元版も現存本は端本であり、宋版もまた同じである。そこで、これらの古版と系統を同じくするわが五山版、それも一応全七部集をそなえている東洋文庫本を基にこの南藏本と対校することにより、南藏本の再編内容ははじめて明らかとなるはずである。ただし、ややこしいことには、快有寺本の南藏テキストは巻三と巻四を欠き、他の残存部分にも欠紙があるのでは、これらの部分は嘉興藏本によつて類推しながら作業しなければならない。

南藏本の再編者は、本書の巻首に刻記される「僧録司右闡教兼靈谷禪寺住持淨戒重校」⁽³¹⁾の一七文字によつて、金陵(南京)靈谷寺淨戒であることが知られる。この人は大慧派第八世の定嚴淨戒であり、南藏に少なからぬ禪籍を入藏させた功

労者であるが、その際に少なくとも数種についてはテキストを重校・再編して入藏させている。淨戒のこうした動向については、すでに野沢氏によつてくわしく解説されているが⁽³²⁾、当該の『明覺禪師語錄』についてもまた、このような一連の重校・再編という作業の所産であった。

さて、当該の南藏本について、淨戒のほどこした重校・再編を、前述の五山版等の古版類との対校や比較検討によって明らかとなつた事項について要約すると、つきのとおりである。なお、個々の細かな論証は煩瑣にわたるので省略する。

1 底本七部集のうち、「頌古集」を除く六集を採り、これを「洞庭錄」「開堂錄」「後錄」「拈古」「瀑泉集」「祖英集」の順に排列して六巻に分巻し、新たに『明覺禪師語錄』の書名を付した。

2 底本に存した題記と、語錄類の巻首に存した各原序、及び付刻されていた塔銘・大慧讚・重刊疏・原勸縁記・原校刊記・原刻工銘などはすべて削除した。

3 「洞庭錄」の題名を「住蘇州洞庭翠峯禪寺語」と改め、本文五則を削除した。

4 「開堂錄」の原題名を削り、語句は前置する「翠峯禪寺語」に接続させ、本文は約一五%量を省略した。

5 「祖英集」は巻上下の分巻をなくして新編巻五と巻六に配し、底本の巻下に含まれていた「送僧四首」を巻五

の中に移項した。

6 冒頭には新たに編集した重顕の小伝をおいた。

以上が淨戒の再編内容であった。「頌古集」を省いたのは、この書がすでに圓悟の垂示等を付した『碧巖錄』一〇卷として広く世に行われたからであろう。⁽³³⁾しかし、この削除を含めて、淨戒の再編は大胆であった。その作業の可否はともかく、初の入蔵書という権威を背負った南蔵本は、のちのテキストに対し大きな影を落すことになるのである。

(二) 北蔵本

北蔵中にも本書が含まれていることは、『大明三藏聖教北蔵目録』卷四に、

扶傾綺四般作三函每函十卷

1518 六祖大師法寶壇經一卷

南密字

1519 宗門統要統集二十卷今作

南漢惠

1520 明覺禪師語銀六卷

南同二
般同

1521 伝法正宗論二卷(34)

1 「塔銘」のみは復旧させて卷末に付した。

2 古版類に付されていながら南蔵本が削除した題記・原序・原刻工銘などは原則として南蔵本のままとしたが、

とあることにより、綺字函に六卷が収録されていることが知られる。しかし、目下のところ本邦では北蔵のセットは未確認であり、したがって閲覧も不能な状況下にある。そのため、この六巻本の内容はまったく未詳なのであるが、一つの

手がかりは竜蔵本の内容である。

清代中期に刊行されたいわゆる竜蔵は、大明北蔵を校訂した蔵經であるといわれる。⁽³⁵⁾近年その影印が刊行されて閲覧を容易にしている。それによれば、本書は『明覺顕禪師語錄』の書名で「九」函に六帖が収められているが、構成・内容とともに嘉興蔵本と全同である。この事実は、嘉興蔵本も竜蔵本とともに北蔵本を底本とし、その北蔵本はこれら両本と同一のテキストであったことを示唆するものである。

もしそうであるならば、南蔵本と嘉興蔵本との相違点は、そのまま南北両蔵本の相違であり、北蔵本は先行する南蔵本に対して、ふたたび大きな再編の手をくわえたことが推定されよう。ここにいたって、北蔵本の行った再編の作業内容こそ、はじめて南蔵本と嘉興蔵本の相違点、および古版類との比較によってたしかめられることとなる。その主要な諸点を要約し、例によって箇条書きにしてみよう。

- 1 全体の構成は南蔵本に準拠した。
- 2 古版類に付されていながら南蔵本が削除した題記・原序・原刻工銘などは原則として南蔵本のままとしたが、
- 3 「開堂錄」は古版の全文を復旧させ、削除されていた名称を新たに「住明州雪竇禪寺語」なる新造の見出し語を付して復活させた。

4、各巻末尾にそれぞれ新たに音釧を付した。

5、冒頭におかれていた重顯の小伝を削除した。

ほぼ以上が北蔵本の再編であった。なお、先にいうとおり嘉興蔵本巻一の「洞庭錄」の巻尾には五山版にない二則があり、南蔵本はここが欠帖で不明であるが、この二則もおそらくは北蔵本が古版類や他本などから拾撫したものであろう。

このように、北蔵本の再編は総じて古版への復旧を意図するものであった。少なくとも語録類についてはそうした傾向が顕著であり、それはさきの淨戒の仕事に対する批判とみてよい。南蔵の完成後、まもなく編纂された北蔵にあって、このような禪籍テキストの流動的な状況は、そのまま当時の禅界の動きを反映しているものとみられる。

ここで、本書の明版とされる内容未詳の本が上海図書館にあるのを紹介しておこう。それは、『現存宋人別集版本目録』が著録する左記の本である。

雪竇和尚拈古一巻 慶元府雪竇明覚大師祖英集二巻 雪竇頭和尚
明覺大師頌古集一巻

明刻本
上海(36)

各集の題名は宋版や元版のそれと等しく、あたかもそれら古版の明代重刊本であるかの感を抱くような記載である。しかし、本書が明蔵本以外に民間で単行されたという記事や目

録を、筆者は寡聞にして知らない。したがって、右の上海図書館本は全七部集セットの端本なのであろうが、刊行時につけられた元版の明代補刻である可能性も考えられる。いずれにしても、現物の調査か、またはくわしい紹介をまたなければならぬ。

(三) 嘉興蔵本以降の諸版

嘉興蔵本は、それ以後のわが国の大蔵経本の祖本となるため、きわめて重要である。ここに改めて巻次構成を掲げておこう。()の中は函号である。

〔第一冊〕

卷一 住蘇州洞庭翠峯禪寺語 (綺三)

拈 古 (綺三)

室中拳古 (綺三)

勘 弁 (綺三)

住明州雪竇禪寺語 (綺三)

卷二 拳 古 (綺四)

勘 弁 (綺四)

歌 頌 (綺四)

後 錄 (綺四)

卷三 拈 古 (綺五)

〔第二冊〕

- 卷四 瀑泉集（綺六）
 卷五 祖英集（綺七）
 卷六 祖英集（綺八）
 塔銘（綺八）

右のように、「住明州雪竇禪寺語」が卷一と卷二に分断されているため、卷二の「後録」や卷三の「拈古」が、それぞれ成立を異にする原初形体を不明瞭にし、さいごの「塔銘」は「祖英集」の付録のような観を呈している。これは、北藏本以来の構成をそのまま踏襲しているからであるが、函号のなくなる正藏經以後になると、原型の不明瞭さは一層強まり、音釈を削除し「明覺禪師語錄瀑泉集卷第四」のような卷名を創設する大正大藏經本に至つて、それは極まることになる。

論をもとにもどし、嘉興藏本は各巻末に付されるつぎのようないい記により、崇禎七年（一六三四）一月に嘉興府楞嚴寺で全六巻が一度に刊行されたことをたしかめておく。

嘉興府楞嚴寺經坊余資刻此

明覺禪師語錄卷第一 計一万零四百

該銀四兩六錢八分 武尊釈智心封

崇禎甲戌仲冬般若堂識³⁷

本邦の黄檗藏本は、この嘉興藏本の覆刻であり、世に黄檗版といわれるその後刷本は、江戸期に何度も刊行されたようである。³⁸

つぎに、底本を「明本」と明記する明治期の縮藏本（騰七）、明示のない正藏本（三一一二）、底本を「増上寺報恩藏本」とする大正藏經本、のいずれもが実際の底本は黄檗藏經本であり、これに若干の削除や改称の手をくわえたものである。その他、大陸では清国末期編の『御選語錄』（一八六七）のように、本書を抄出収録するものであっても、単行された形跡は今日にいたるまで知られていない。

このようにみると、現今ふつうに見られる本書のテキスト類は、ほぼ嘉興藏本を基にしているわけである。爾来約三六〇年余、これまで永く忘れ去られていた古版類の検討によつて、嘉興藏本は二度にわたる大きな再編の手を経たテキストであることを、われわれは改めて認識しなければならない。

嘉興藏本は「頌古集」を欠くのみならず、古版類とは構成と内容にかなりの相違があるのである。卑見によれば、これは近代の大藏經に入藏しているほぼすべての中国禪籍にみられる現象であり、本書のケースはその一つの典型にすぎない。

四 別行書の古版類

重頭の選述した七部集のうち、古くから単独で別行されたものに、「頌古集」と「祖英集」がある。前者は南宋初期に圓悟克勤によつて装い新たな『碧巖集』となり、広く世に流布されるのは周知のとおりである。七部集が南藏に初めて入

蔵する際、この「頌古集」が除かれた理由は、世はすでに『碧巖録』の時代であり、あえてその基部を入蔵させる必要なしとした淨戒の措置は、まさに時代の要請であった。しかし、それでも「頌古集」は忘れられることなく、元版や明版が刊行されたのである。

いっぽうの「祖英集」は完全に偈頌・詩歌の文学的作品で

あるためか、これも江湖の関心をあつめ、宋代以降に何度も別行されることがあった。そこで以下においては、これら二書の古版類を中心に紹介し、テキストとしての特徴や問題点を検討したい。

はじめに、この二書の別行諸版と主要筆写本とを合わせた別行本一覧を掲げておく。

(一) 頌古集		(二) 祖英集	
No.	仮称	No.	仮称
⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①	冠四慶五元元 禪門逸書注庫安山 本本本版版	明合明四家錄本 塗毒刻本 注鼓本 本	至正21 明治21 昭和21 西暦
民天乾慶泰 国保隆安倉定 69 6 43 3	(鎌倉末)	56 5 21	西暦
一九八〇	一六五〇 一七八 一八三二	一三三四 一八八八 一九一六 一九八一	西暦
二卷	二卷 二卷 一冊	一卷一冊 一卷 一卷一冊	西暦
台北、明文書局	京都、秋田屋平左衛門 京都、小川源兵衛 写本	大明寺海島 京都、出雲寺文治郎 京都、貝葉書院 東京、筑摩書房	西暦
駒大、椎名 珍本別集影印 駒大、椎名	駒大、椎名 積翠軒旧藏 莫友芝旧藏 国立中央図、積翠軒旧藏	駒大、北京 駒大、北京 駒大、北京 駒大、北京 所	西暦
禪門逸書一初三		15 禅の語録	在

(一)、頌古集

本書の古版としては、元の至正二年（一三四二）に大明寺海島によつて刊行された「四家錄」四卷四冊に含まれる一冊があり、台北の国立中央図書館に二本、北京図書館に二本がそれぞれ所蔵される。ちなみにこの「四家錄」とは、天童・雪竇・投子・丹霞という四家の頌古集を集めたもので元代に刊行されている。

国立中央図書館本については、阿部隆一氏による解題があるので、左にそれを引こう。

〔全四卷四冊中の一冊〕

首に、釈曇玉の「雪竇明覺和尚頌古集序」（末の左端が破損しているが、別蔵の次掲本によれば、「至正壬午歲重書」の一行あり）あり。本文巻首「雪竇頤和尚頌古」、次行低七格「參學小師 遠塵集」と題す。巻末第二六葉以下を欠き、末に至正壬午鷹賓節日雲山野僧慧從書の「新刊四家錄後序」（首葉と次葉とが逆に綴じらる）が附さる。⁽⁴²⁾

〔同、一冊のみの端本〕

装訂前者に同じ。（椎名注、前者とは本書直前に著録される「天童覚和尚頌古」のこと）で、後補藍色表紙、二五・七×一五・五cm、襤装。なお、この本も「四家錄」の端本である）第三一表葉に止り、以下巻末欠了。「姚埭／老民」⁽⁴³⁾「廣道／意齋／藏詒」⁽⁴⁴⁾「長／宣子／孫」印あり。⁽⁴³⁾

右のように、二本とも巻末を欠く尾欠本である。なお、同

解題では「四家錄」はすべて四周双边、有界一〇行、行一八字であるといふ。また、北京図書館本については、『北京図書館古籍善本書目』子に、左記の著録がある。

雪竇頤和尚頌古一卷宋釈遠塵輯
明補修本一冊元至正二年大明禪寺釈海島刻
十行十八字黒口四周双边一〇五九七
雪竇頤和尚頌古一卷宋釈遠塵輯
元至元二年大明
禪寺釈海島刻明補修本一冊元至元二年大明
禪寺釈海島刻明補修本一冊

右によれば、この北京図書館蔵の二本は、中央図書館本と刊時・刊者・匡郭・行格が等しく、要するに「四家錄」本の零本か別刷本であるのに相違ない。この二本中的一本は、もと鉄琴銅劍樓の所蔵であったようである。⁽⁴⁵⁾

筆者は中央図書館本の「四家錄」セツト本の影印で知るのみであるが、本文は全百則の頌古中、第八一則の首部「……与汝喫底人遂具眼」までを現存し、以下の本文を欠いていふ。そして現存部分の排列をみると、いわゆる流布本系『碧巖錄』のそれとは異なり、道元の「一夜本」や前掲宋版（四部叢刊本）・五山版の「頌古集」のそれと完全に一致している。いうまでもなく、古型を保存するものである。

さらに注目すべきは、巻首におかれることの「曇玉の序」である。この序は半葉七行一二字の大きな行書体であり、宋版や五山版が本文と同じ刻字体であるのとは異なる。また、序題を「雪竇明覺和尚頌古集序」とし、宋版・五山版の「雪竇頤和尚明覺大師頌古集序」とあるのに比較して素朴である。つまり、本版の曇玉序は、曇玉の自筆またはその模写を印刻した古型

を保存しているものとみられる。ただし、序文の字句を宋版・五山版と対校すると、中間の「不」、「瞬間」を「不以瞬間」とするほか、まったくの異字はない。また、本文についての大きな相違点は、各則の頌の直前に宋版・五山版にある「頌曰」の二字が本版には存在しない点である。

このようにみると、この「四家錄」本は七部集の現存本宋版よりもおそらくは古い形を保存しているものと思われ、テキストとしてはきわめて貴重な一本である。

つぎに「頌古集」の明版とされる一本が北京図書館に所蔵されることを、『北京図書館古籍善本書目』子がつぎの著録によつて示している。

雪竇顯和尚頌古一卷宋积遠塵輯 明刻本一冊 十行十八字黒口四周双辺
七〇二六⁽⁴⁶⁾
ただし、この版式はさきの元版「四家錄」本のそれと同じであるから、本版は元版の補刻版か重刊本かのいずれかであると思われる。

なお、これらのはかに「頌古集」だけの別行本としては、明治二年（一八八八）に京都の出雲寺文次郎から刊行された「五部合刻」所収本、大正五年（一九一六）に京都貝葉書院刊行の「塗毒鼓」所収本などがあるが、それらの底本は近代の蔵経本であると思われる。これに対して、昭和五六年に東京筑摩書房から「禪の語録」15『雪竇頌古』として刊行された

一冊は、前掲の四部叢刊本を底本とするもので、梶谷宗忍氏の訳注に柳田聖山氏の詳細な解題を付した本書空前の学術的成果である。

（二）、祖英集

『祖英集』の刊行本としては、宋版とされるもの、元版・五山版などの古版類、明代の「四庫全書」本系統、それに江戸期の刊本などがある。

まず、宋版とされる一本は台北の国立中央図書館に二卷一冊本があり、阿部隆一氏による左記の解題がなされている。
慶元府雪竇明覚大師祖英集 二卷 宋积重顯撰 〔南宋〕刊

一冊

新補金沙子散し艶出紫色表紙（二三×一四・五糸）、裏打補修が加えらる。巻首「慶元府雪竇明覚大師祖英集上」、次行低十格「参学小師 文政序」と題し、天聖十年の文政序があつて、正文に接属する。但し巻首一葉は補写。巻上の尾、下の首尾大題は「慶元府雪竇明覚大師祖英集上（下）」。巻末に、治平二年呂夏卿撰「明州雪竇山資聖寺第六祖明覚大師塔銘」、「大慧和尚讚師画像」、次に浙江万寿住山自如撰の募刻書疏が附さる。疏の末に「童行祖栄同募縁」の一行及び「四明徐汝舟刊」の刻工名の单辺木記一行が刻されている。左右双辺（一八・一×一一・八糸）有界十一行、行廿字。版心白口单黑魚尾、「英上（下）（丁付）」、上象鼻に間々大小字数あり。玄の字以外欠筆が見えない。全巻に室町時代の僧による朱点朱引、僅かながら朱筆の訓点が附され、墨筆の校注

の書入がなされている。日本からの逆輸入本である。「山陰／錢氏／藏書」「激懷／堂珍／藏記」⁽⁴⁷⁾「逈圃／収藏」の印あり。逈目

著録。瞿目瞿影著録本（北京図書館現蔵、四部叢刊に影印）と同版本で、我が國の正応二年刊・鎌倉末刊の二種の五山版は本版の覆刻である。⁽⁴⁷⁾

右の解題中にいう「瞿目」とは、民国初めごろに呉興の藏書家である張乃熊による自撰の藏書目録『逈圃善本書目』のこととで、卷一の宋刊本、子部の項につぎの記載がある。

慶元府雪竇明覺大師祖英集 二卷 宋釈重頭撰 宋刊本 一冊⁽⁴⁸⁾

したがつて、中央図書館本は張氏逈圃の旧蔵書であり古くから宋版とされていたのであるが、右の解題中に本版を四部叢刊の影印本と同版とするはどうであろうか。なるほど両者の版式は等しい。しかし、本版の末尾に付刻される「塔銘」などの五点は四部叢刊本ではなく、むしろ原刻工銘とみられる「四明洪拳刊」の五文字が刻されているのは、すでに第二節でのべたとおりである。そして、本版「祖英集」の五点は、これも前掲の五山版東洋文庫本の「瀑泉集」末尾に補写されており、これらがじつは元版七部集に刻されていたことはさきに論述したとおりである。元版七部集の版式もまた四部叢刊本と等しい。

この末尾に指示する写真は、右書の巻首半葉（文政序）と巻末半葉（自如の重刊語録疏の最終一行、及び「童行祖英同募縁」「雪竇住山 守堂 劝縁」「四明徐汝舟刊」の三行、及び徳雲序の首部一行）が同書目の図録篇に掲載され、現蔵者未詳の今日、末学をすこぶる裨益している。

この解題と写真によれば、本書はさきにのべた全七部集のことはさきに論述したとおりである。元版七部集の版式もまた四部叢刊本と等しい。

ここで注目されるのは、かつて石井積翠軒文庫の所蔵で現蔵者未詳の本書元版とされる一本である。この本を『石井積

翠軒文庫善本書目』本文篇では、つぎのように解題する。

雪竇明覺大師祖英集 二卷 一冊

元刊。巻首に天聖の文政序、巻末に開禧元年徳雲・泰定の如芝の題あり。左右双辺、有界、十一行二十字。匡郭内、縦六寸、横三寸九分。版心「英上（下）（丁数）」。初印と認められ、上巻二十三葉、下巻十六葉、附七葉。下巻の末に塔銘等を附し、其の終りに自如の重刊疏があり、「寺既燬印板亦隨爐人每病其磨滅而欲新之今其時矣凡我同志痛先覺之洪規闡千載之芳烈其可後手（後略）」又「童行祖英同募縁 雪竇住山守常勸縁」の刊記及び「四明徐汝舟刊」の木記がある。全巻に室町末期頃加筆の朱墨附訓が見え、巻首に「一糸」の朱印記がある。一糸和尚旧蔵。水色古表紙を存し、大いさ、縦八寸四分五厘、横五寸三分。（第四一五・四一六図⁽⁴⁹⁾

右の末尾に指示する写真は、右書の巻首半葉（文政序）と巻末半葉（自如の重刊語録疏の最終一行、及び「童行祖英同募縁」「雪竇住山 守堂 劝縁」「四明徐汝舟刊」の三行、及び徳雲序の首部一行）が同書目の図録篇に掲載され、現蔵者未詳の今日、末学をすこぶる裨益している。

この解題と写真によれば、本書はさきにのべた全七部集の泰定元年刊本そのものと同じであり、おそらくはその零本一冊にほかならないであろう。何よりも自如の重刊疏を同版式で巻末におくことがその証左である。そして注目すべきは、以下につづく諸刻記が、かの東洋文庫本五山版七部集の「瀑

泉集」末尾に補写されるものや、右の中央図書館本「祖英集」卷末の刻記と、それぞれまったく同一なことである。これら的事実は、中央図書館本がじつは泰定元年刊行の元版にほかならぬこと、および東洋文庫本の補写が同じ元版「祖英集」の卷末から採録したこと、などを証するものであろう。

もとより、書誌学の権威であられた阿部氏の所説は貴重ではあるが、七部集関係の古版類を総合的に検討するかぎりでは、中央図書館本を元版とみておきたい。斯界からのご教示がいたければさいわいである。

つぎに「祖英集」の元版が存在していた可能性を示すものに、清末に貴州の莫友芝（一八一—一八七二）の蔵書目である『邵亭知見伝本書目』卷一二に著録されるつぎの本があげられる。

祖英集二卷
宋积翠軒撰
元刊本

ただし、このほかに別行の元版については知られず、また莫氏の蔵書のその後における動向も未詳である。したがって、右はあるいは、前述の泰定版の零本であることも考えられる。

以後、大陸では清代の「四庫全書」集部に「祖英集」二巻が収録され、近年の「四庫全集」珍本別集や「禅門逸書」初編などの叢書に影印されている。「四庫全書」本は元来筆写本であり、底本も明示されていないが、なぜか巻尾を欠いてい

る。すなわち、巻尾にちかい「歌紀四明汪君信士」の本文途中である「……兮困胸臆」まで筆を止めているのである。

このテキストは上下二巻に分巻され、また南蔵本以降の蔵経本が巻下の「送僧四首」を巻上におくのに対し、古版と同じ巻下にあるなどから、底本は宋元代の古版にちがいないか、たまたま尾欠本であつたなどの理由によるものであろうか。なお、近年に北京から刊行された「四庫釈家集成」⁽⁵¹⁾全三冊中には、なぜか「祖英集」は採録されていない。

つぎに③の五山版であるが、これは七部集が正応二年（一二八九）に刊行された際の刊本で、「祖英集」のみ独立して流傳したものがかなりあつたようで、『五山版の研究』巻上には、石井積翠軒文庫・内閣文庫・成竇堂文庫・東洋文庫の四本を著録している。⁽⁵²⁾これらのうち、積翠軒文庫旧蔵の一本は現在の三浦武利氏蔵本であると思われ、また、ほかにも建仁寺両足院に一本があるようである。⁽⁵⁴⁾

筆者は右の諸本中、内閣・成竇堂・東洋の各文庫本を閲覧しているが、版式も文字の形も東洋文庫の七部集と同じである。ただし、成竇堂本だけは文字の異なる部分があり、補刻が混入している。また、巻末には「塔銘」「大慧讚」「重刊疏」「募縁者銘」の四点が補写されていて、これらが元版「祖英集」の末尾に刻記されていたという前述の論旨を傍証している。

さらに、この正応版とは別種の有界本で鎌倉末期を下らぬ一本が、もと積翠軒文庫に所蔵されていたことが、同文庫の解題⁽⁵⁵⁾によつて知られるが、これは現蔵者未詳である。

下つて江戸期には、「祖英集」は冠注本まで作られて流行している。まず、慶安三年（一六五〇）に京都秋田屋平左衛門から刊行された④は右の五山版の重刊であり、巻末には「四明洪拳刊」の原刻記までも保存している。筆者は、本版の後刷とみられる松月堂小川源兵衛から刊行された一本を所持している。

また、⑥の冠注本は天保六年（一八三二）に同じ京都小川源兵衛の刊行であるが、これにも天保五年の募縁序等を付したものとの二種がある。その他、江戸期には「祖英集」の注釈書は数本が知られるなど、本書がかなり江湖で流行したことを物語つている。

五 諸版の系統

以上、重顕の七部集について、現存する古版類を中心とする文献史的な検討を行つてきたが、これに基いて諸本の系統図を作成してみたい。ただその前に、宋代の大部から成る禅籍中には重顕の語録を少なからず収録するものがあり、資料的価値のみならず、七部集の宋版周辺の解明に益するので、そうした三種について考察しておきたい。

(一) 宗門統要集

『宗門統要集』一〇巻は、北宋代までの禅門における代表的な公案とその拈古を宗永が編集した有益な書であるが、從来は紹興五年（一一三五）ごろの成立であるとされてきた。しかし、筆者は古版類の調査により、その成立は四〇年以上もさかのぼる元祐三年（一〇九三）以前であることをたしかめている。⁽⁵⁶⁾ とすれば、本書中に引かれる重顕の語句は『建中靖国統燈錄』（一一〇一）よりも古く、貴重な引文ということになろう。

『宗門統要集』巻一〇の巻末にちかく、重顕の語句は一〇則が引かれている。もつともこれは本則だけの数であり、拈古の語句まで拾うと全巻中の隨處に散見される。そこでいまは東洋文庫所蔵の宋版テキストによりこの一〇則のみを対象として、重顕の現行本語録中のいづこに該当する語句であるかを調査した結果を、以下に羅列してみよう。（Tは大正蔵経、Zは大日本統蔵経）

- 1 「因六人新到相看便問……師打一坐具推出」（洞庭錄 T 四七一六七三**a**）

- 2 「師因數人新到來師乃云……与你一椀茶喫」（洞庭錄 T 四七一六七三**b**）

- 3 「師遊方時間大竜云……師云和尚更須行脚」（祖庭事苑卷四所収、雪竇拾遺 Z 六四一三七四c）

- 4 「師示衆云諸人要知真……壁立千仞」（未詳）
- 5 「師舉古云眼裏著沙……一人為師」（未詳）
- 6 「師因新到人事便問……師云一狀領過」（未詳）
- 7 「師問新到閻黎……師隨後與一拄杖」（後錄 T四七—六八
一c）
- 8 「師嘗問羅漢林禪師……師拍一拍下去」（雪竇拾遺 Z六四
一三七四c）
- 9 「師問僧近離甚處……何不早与麼道」（開堂錄 T四七—六
七七b）
- 10 「師到太湖有余巡檢……師便起去」（開堂錄 T四七—六七
七c）
- 右のうち、4 5 6 の三則は現行本語録はおろか、古版類の中にはすらみいだすことのできない語句である。また、3 と 8 は『祖庭事苑』（一一〇八）が編集された当時、既刊の七部集以外に世に遺存している重頭の語句を編者が蒐集して収録した「雪竇拾遺」にのみみいだせるものである。ただ、8 は文字の異同が特に大きい。いずれにしても、右の一〇則は七部集の成立順とは関係なく排列されており、現行本と合致する則も、文字が全同なものは一つもない。
- これらのことからみて、『宗門統要集』に収録される重頭の語句をみるとかぎりでは、七部集の刊行本とは関係なく、諸方に伝存していた語録や語句の中から選んで採録したのでは

ないかと思われるのである。つぎに紹介するように、『祖庭事苑』は七部集の既刊本を対象として訓詁を行っている。してみると、七部集の初刻本は『宗門統要集』の成立から『祖庭事苑』編成までの一五年間に世に出されたのであろうか。このように、七部集の初刻時期はなお今後の検討課題である。

(二) 祖庭事苑

大觀二年（一一〇八）に成ったといわれる『祖庭事苑』八巻は、禪門先哲の語録や禪籍類の語句二千四百余を対象とする訓詁であるが、分量的には約半分が重頭の七部集を対象としている。いま、『祖庭事苑』が語注の対象とする七部集の名称を卷次別に示すと、左記のようになっている。

卷一後半 雪竇洞庭錄
卷二 雪竇後錄

雪竇瀑泉集

雪竇拈古

雪竇頌古

雪竇祖英上

卷三 雪竇祖英下
卷四 雪竇開堂錄

雪竇拾遺二九則

右に並んだ七部集の順序は、第一節に掲げた各集の成立順とは異なるし、また呂夏卿が重顯の寂後一三年目に撰述した『明覺禪師塔銘』の中での七部集の名称順序とも一致しない。すると、『祖庭事苑』の編者である陸庵善卿は、いったい何を基準にして右の七部集の順を定めたのであらうか。

陸庵は七部集の既刊本を知っていた。それは『祖庭事苑』中の語注のうち、対象語句が底本のいかなる部分であるかを明示するものが左記の四例もみられることから、それは明らかである。

1 卷一、洞庭錄

「道遠乎哉 觸事而真意旨如何。 第七板第四行上、脱

2 卷二、拈古

「示衆云、俱胝和上。 第十六板十二行中、四字脱。」

(Z 六四一三三三 b)

3 卷三、祖英上

「輕触不輕触 第三板一行、脱三字。」(Z 六四一三四六 a)

4 同

「獨運孤明 第三板十三行、脱運。」(Z 六四一三四六 b)

右の四例から、底本の版式を類推することはできないであろうか。そこで、該当する部分を一紙一行二〇字の行格をもつ宋版・五山版の部分と対比してみると、底本一紙の字数

は宋版等の九割弱であることがわかる。したがって、かりに半葉一〇行であれば一行が一八字詰め、九行ならば二〇字詰め、という行格が推定される。ちなみに、前節でみた「四家錄」本の「頌古集」は現存宋版の七部集本よりも古型を保存していたが、その行格はまさしく一〇行一八字であった。

いずれにしても、『祖庭事苑』が用いた七部集の既刊本は、現存宋版（四部叢刊本）とは版式を異にする北宋版であったことが、これで明らかとなつた。それはおそらく七部集の初刻本であつたと思われるが、その時期は明瞭を欠くこと、すでにのべたとおりである。

(三) 続刊古尊宿語要

紹興の初年、鼓山（福州）の僧挺守磧が二〇家二二卷の『古尊宿語要』を編集・刊行し、淳熙五年（一一七八）に鼓山の小菴德最が二二家に増補して刊行し、さらに嘉熙二年（一二三八）、鼓山の晦室師明が全一〇〇家一〇策と増大させて刊行した。この際に新增した八〇家六策の部分が『續刊古尊宿語要』であり、その地集に「雪竇禪師語」として重顯の語句二四則が収録されている。わずか二四則にすぎないが、その編集時期はあたかも七部集の現存宋版と五山版との間であり、しかも現存宋版は語録類を欠くから、これらの遺存語句は貴重であり、宋版の状況を知るべき資料となるものである。

そこでさきの『宗門統要集』の場合と同様に、これら二四則が重頭の現行語録のどこに該当するかを調査し、以下に示してみよう。なお、現行語録は便宜上大正藏經本を用いて各則次の番号を付し、大正藏經本にみられぬ則は五山版によつて示した。

- 1 「師開堂陞座……以助無為之化」(開堂錄⁽¹⁾後半、T四七一六七八〇a)
- 2 「翠峯受疏……便下座」(開堂錄⁽²⁾、T四七一六七四a～b)
- 3 「因僧送拄杖子師……以拄杖一時趁下」(開堂錄⁽¹⁰⁾、T四七一六七五c)
- 4 「形興未質……實謂恩大難酬」(開堂錄⁽¹²⁾、T四七一六七六a)
- 5 「未出母胎……便下座」(開堂錄⁽¹³⁾、T四七一六七六a)
- 6 「諸仁者……應無希冀」(開堂錄⁽¹⁴⁾後半、T四七一六七六a)
- 7 「直鈎釣鯨鯨……便下座」(開堂錄⁽¹⁸⁾、T四七一六七六b)
- 8 「日日日東上……便下座」(後錄⁽¹⁾後半、T四七一六七九b)
- 9 「因雪示衆……天網恢恢」(後錄⁽⁵⁾、T四七一六七九b)
- 10 「田地穩密底……暮打八百」(五山版後錄⁽¹⁰⁾)
- 11 「春山疊亂青……作賊人心虛」(後錄⁽¹⁴⁾、T四七一六七九c)
- 12 「大無外小無外……帰堂」(後錄⁽¹⁵⁾、T四七一六七九c)
- 13 「一不定二不可……鼻孔穿了也」(後錄⁽¹⁸⁾、T四七一六七九c～六八〇a)

- 14 「小參云須菩提……以拄杖一時趁下」(後錄⁽²⁰⁾、T四七一六七八〇a)
 - 15 「上堂不得春風花不開……帰堂」(後錄⁽²⁵⁾、T四七一六八二c)
 - 16 「長觜鳥芳樹不棲……便下座」(後錄⁽⁹⁸⁾、T四七一六八四a)
 - 17 「有時堅起拄杖云……便下座」(後錄⁽¹⁰⁰⁾、T四七一六八四a)
 - 18 「巢知風穴知雨……參」(後錄⁽¹¹²⁾、T四七一六八四b)
 - 19 「雪覆蘆花欲暮天……空把山童贈鐵鞭」(後錄⁽¹²²⁾の頌のみ、T四七一六八五a)
 - 20 「祚迦已滅……不消一劄」(洞庭錄⁽⁵⁾、T四七一六六九c)
 - 21 「劍輪飛処……各自努力」(洞庭錄⁽⁶⁾後半、T四七一六六九c～六七〇a)
 - 22 「立賓立主……應須自看」(洞庭錄⁽⁸⁾後半、T四七一六七〇a)
 - 23 「以字不成……不愛南山愛鱉鼻」(後錄⁽¹³⁾前半、T四七一六七九c)
 - 24 「還有閑市裏……便下座」(後錄⁽³⁾、T四七一六八三a)
- 右のような調査の結果、二四則の排列は、開堂錄(七則)、後錄(一二則)、洞庭錄(三則)、後錄(二則)という順序になっている。そして、各語録中の則の排列順に準じて採録されていることがわかる。二四則中、現存語録中にみいだされない則がなく、しかも採録順が収録順に一致するという事実は、

これらの「雪竇禪師語」が當時世に行われていた七部集の宋版から採録したことを示すものであろう。

當時流布していた宋版は、前述の開禧版（一二〇五）か現存の四部本（一二三五）かのいずれかであろう。いずれかを確定する資料にとぼしいが、いまは全七部集セットの前者と推定しておきたい。

以上、重頭の語句を比較的豊富に収録する宋代の古資料三種について、それらの底本や典拠についての検討を試みた。その結果、『宗門統要集』（一〇九三）の時点では、七部集の既刊本を依用していないことが推定され、『祖庭事苑』（一一〇八）と『統刊古尊宿語要』（一二三八）の二種は明らかに既刊本を依用していることが判明した。しかしながら、これらの二種に共通するのは、依用した既刊本七部集の順序が、例の呂夏卿撰の「塔銘」の所説とも成立年次順とも異なる点である。とすれば、七部集の初刻本はいつたいどのような順であったのであろうか。

結論からいえば、初刻本には一応の順序があり、最前部の巻頭に総序や題記が付せられていたのであろうが、七集個々の序列などはさして厳密ではなく、むしろ便宜的であつたと思われるるのである。なぜならば、七部の書はもともと編者を異にし、個性的な書名が与えられ、「洞庭錄」を例外に原序

が付けられた、いわば独立した書であった。全七部という構成は、あくまで後人の粉飾である。総じて、宋元版の禅籍に個性的な名称が少くないのは、それが尊重されたからであり、撰述者に対する態度と軌を一にする。

当該の七部集も、そうした個性が重んじられていたからこそ、全体の序列や調卷がなされぬままに刊行されたものであろう。調卷や序列のないセット本は、刊行当初から分散やすいという宿命をになう。七部集の宋版・五山版のいずれもが、現存本はほとんど断欠本や零本である理由は、まさしくこうした性格にあるとみてよい。してみると、東洋文庫の五山版が一応のセットを遺しているのは奇蹟的ともいえるもので、改めてその貴重性を痛感する。

以上、所論ははなはだ多岐にわたつたが、当該の七部集は文献史的に教示するところが多く、その点では宋元版禅籍の中でもきわめて重要な一書というべきであろう。さいごに、検討したところによつて、諸本の系統図を作成しておく。

注

(1) この入蔵問題については、永井政之「雪竇の語錄の成立に関する一考察—雲門宗研究の為の文献整理—」(『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第六号、昭和四七年三月)、及び柳田聖山氏による「解説」(『禅の語錄15『雪竇頌古』、東京、筑摩書

房、昭和五六六年一月)にくわしい。

(2) T四七一七一二c～七三a

(3) 「師一日問僧、爾見雪竇後錄未。僧云、見了。師云、向甚處見我。僧云、也知和尚是川中人。師將拄杖打一下云、夢見。」(T四七一六九四c)。

(4) 前掲注(1)の両説参照。

(5) 前掲注(1)。

(6) 前掲注(1)。

(7) 『北京図書館古籍善本書目』(北京、書目文献出版社、一九八七年三月)集、二一〇七～八頁。

(8) 鄭偉章・李万健共著『中国著名藏書家伝略』(北京、書目文献出版社、一九八六年九月)所収「瞿氏鉄琴銅劍樓」を参照(一五六頁)。

(9) 「書目叢編」(台北、廣文書局、民国五六年)に影印収録。

(10) 拙著『宋元版禪籍の研究』(東京、大東出版社、一九九三年八月)四九四頁を参照されたい。

(11) 長沢規矩也「宋刊本刻工名表初稿」「宋刊本刻工名表」(「長沢規矩也著作集」第三巻『宋元版の研究』、東京、汲古書院、昭和五八年七月)、阿部隆一「宋元版刻工名表」(「阿部隆一遺稿集」第一巻、東京、汲古書院、平成五年一月)、その他。

(12) 尾崎康『正史宋元版の研究』(東京、汲古書院、一九八九年一月)、三二～五頁。

(13) 川瀬一馬『五山版の研究』(東京、日本古書籍商協会、昭和四五年三月)上巻、七〇頁および四〇〇頁。

(14) 亀井孝等共編『岩崎文庫貴重書書誌解題』I(東京、東洋文庫、平成二年五月)、七八頁b～七九頁b。

(15) 川瀬一馬編著『新脩成竇堂文庫善本書目』(東京、お茶の水図書館、一九九二年一二月)、四五九頁b。

(16) 川瀬一馬『大東急記念文庫貴重書解題』第二巻、仏書之部(東京、大東急記念文庫、昭和三十一年一〇月)、一五八頁b～一五九頁a。

(17) 前掲『五山版の研究』巻上、七〇～三頁。

(18) Z八三一三〇九a

(19) 『咸淳臨安志』巻八〇(「宋元地方志三十七種」第七冊四六三九頁a)。『大明一統志』巻三八、一七b(台北、文海出版社、一九六六年八月。第五冊二七一三頁)。

(20) 『増集続伝燈錄』巻四に所伝がある(Z八三一三〇九a)。

(21) 永井氏が自如の重刊疏を開禧元年開版時のものとみている(前掲注1論文)のは誤認であろう。柳田氏もまたこれを踏襲している(前掲注1解説)。

(22) 二三八頁c。

(23) 九八七頁上～九八八頁下。

(24) Z八三一三一六b～c。

(25) 『中國仏寺史志彙刊』第一輯第一八冊、五九七～八頁。

(26) 山夫行編・道嚴行補『雪竇寺誌』巻九上に所収される陳著「重修雪竇寺記」に「戊子(至元二五年)夏四月夜寺災、風烈不可撲滅、惟衆寮惟衆堂存。」(九a)とみえる。

(27) 『上海図書館善本書目』(上海図書館編刊、一九五七年五月)卷四、5b。

(28) 昭和法寶総目録、二一三五四a。

- (29) 野沢佳美「明初の洪武南藏について—呂澂氏の「南藏初刻考」を通して—」(『立正史学』第六九号、平成三年三月)、及び同氏「明代南藏初入藏禪籍と定巖淨戒」(『宗学研究』第三四号、一九九二年三月)を参照。
- (30) 平成三年三月、宗教典籍研究会刊。
- (31) 前項注(30)、八〇頁c。
- (32) 「明代南藏本『古尊宿語録』について」(『禪学研究』第六八号、平成二年三月)、及び前掲注(29)の「明代南藏初入藏禪籍と定巖淨戒」を参照。
- (33) 『碧巖錄』の大陸における初期の流布状況については、末木文美士「『碧巖錄』の諸本について」(『禪文化研究所紀要』第一八号、一九九二年五月)が最新の学術成果であり、宋版三本があつたことなどを論証している。
- (34) 昭和法宝総目録、二一二九六b。
- (35) 大蔵会編『大蔵經—成立と変遷—』(京都、百華苑、昭和三九年一一月)八三頁、長谷部幽蹊『明清仏教研究資料』文献之部(名古屋、駒田印刷、昭和六二年一一月)、四〇頁。
- (36) 一六頁b。
- (37) 中華大蔵經、第二輯第三冊、一一六一c。
- (38) 駒沢大学図書館に所蔵されている。
- (39) 「大正新脩大蔵經勘同目録」の記載である(昭和法宝総目録一一五一三b)。
- (40) 前掲注(10)拙著、第三章第三節、および第四節を参照されたい。
- (41) 拙稿「元版『四家錄』とその資料」(駒沢大学仏教学部論集)第一八号、昭和六二年一〇月)。

集』第一〇号、昭和五四年一一月)参照。

(42) 阿部隆一『^{増訂}中国訪書志』(東京、汲古書院、昭和五八年三月)、五三七頁上。

(43) 同右、五三七頁下。なお、右解題の後半は省略した。

(44) 一六二二頁。

(45) 『鉄琴銅劍樓藏書目録』(『書目叢編』に影印所収)卷二〇にその解題がある。

(46) 一六二二頁。

(47) 前掲注(42)、五六〇頁上。

(48) 「書目三編」中に影印されている。なお、前掲注(10)拙著の五一四~五頁を参照。

(49) 川瀬一馬編『石井積翠軒文庫善本書目』(東京、凸版印刷、昭和一七年一〇月。京都、臨川書店、昭和五六年五月複製)本文篇、二一六頁。

(50) 前掲注(10)、拙著五〇四頁参照。

(51) 北京、同心出版社、一九九四年六月刊。

(52) 四〇九頁上。

(53) 『斯道文庫収蔵マイクロフィルム等目録初稿』(東京、慶應大学斯道文庫、昭和六二年三月)、九八頁b、の記載による。

(54) 『建仁寺両足院藏書目録』の第五五番中に「祖英集^{五山}一」なる著録がみられる(昭和法宝総目録三一九八五b)。

(55) 前掲注(49)、三五頁。

(56) 『新纂禪籍目録』、二六七頁c~二六八頁a。

(57) 拙稿「『宗門統要集』の書誌的研究」(『駒沢大学仏教学部論集』第一八号、昭和六二年一〇月)。

*本年夏に上海図書館の宋元版調査に赴かれた慶應大学斯道文庫の尾崎康先生にお願いして、この元覆宋刻本とされる三集本を調査していただいた。その結果、小論の脱校後に調査概要のご教示をえたので付記する。

版式は左右双辺（一七・二×一一三）、一二行二〇字、版心小黒口。全体の構成は、（一）「拈古」二四紙（允誠・思恭序、本文）、（二）「頌古集」二八紙（序、本文、原校勘記）、（三）「祖英集」上二三紙・下二六紙（文政序、本文）。蔵書印は「克文」「寒雲子々孫々永保」「寒雲鑒賞之珍」「寒雲秘笈珍藏之印」「僕宋」「後百宋一塵」「与艸身俱存亡」「上海図書館蔵書」の多くがあり、寒雲を号とする袁克文（一八九六～一九三二）の旧蔵書。版刻は目録通り覆宋元刻とみてよい。

ほぼ以上であるが、版心の相違等により、この元版は前述した本書の宋・元版各種とは異なる別版であると思われる。なお、貴重なご教示をいただいた尾崎先生には心から感謝申しあげるし下さい。

諸本の系統図

